

〔「朝鮮の絵画と工芸」展によせて〕

15・16世紀の朝鮮画壇と中国山水画との関わり—出陳作品を中心に—

本展では、15から16世紀にかけて朝鮮半島で制作された山水画について、初公開作品を含めて特集展示します。ここでは、半島の作品が中国大陸の絵画史とどのように関わってきたかについて、出陳作品を中心に概論したいと思います。

李成(919~967)は、唐帝国崩壊後の、五代十国と呼ばれる戦乱の時代に活躍した山水画家です。現在の山東省に生まれ、華北地方の広大な山水風景を描いて、「李成の淡墨、夢霧中の如く、石は雲の動ぐが如し」(北宋・米芾「画史」)と評されました。やがて北宋が中国を統一します。河南省出身の宮廷画家・郭熙(?~1054~1087?)は、李成の山石・樹木の描法や卓越した筆墨法をよく学び、遠近表現を整理して、無限の空間を描くための構築的な山水画様式を大成しました。南宋時代を経、モンゴル統治下の元時代において、彼らの山水画風は、華北地方伝統の「李郭派」と認識され、所謂雲頭皴(雲のようにやわらかく膨らませ、曲線的な皴を施す山石の描法)や蟹爪樹(枝の先端に爪状の短い弧線が見られる樹木の描法)がその標識として定式化していきます。趙孟頫(1254~1322)や唐棣(1287~1355)、朱德潤(1294~1365)は、元代に復古様式として李郭派を学んだ画家たちです。

郭熙の息子・郭思が編纂した「林泉高致集」には、北宋から高麗に2

点の郭熙筆山水画が下賜されたという有名な記事が載っています。後に高麗が元に降伏すると、元代李郭派作品も直接的に高麗に伝来したと考えられます。例えば、元の首都・大都で育った忠宣王(1275~1325)と、趙孟頫・朱德潤らとの親交が知られています。郭熙系統の山水画はその後も朝鮮半島に多く流入しました。朝鮮王朝の王族・安平大君(1418~1453)の絵画コレクションには、郭熙・郭熙派の作品が17件あったと伝わります(申叔舟「画記」)。

当然ながら、李郭派山水画様式は朝鮮画壇に深く浸透してきました。安堅は15世紀を代表する朝鮮の山水画家ですが、彼が安平大君のために描いた「夢遊桃源図巻」(1447年、天理大学附属天理図書館蔵)には、李郭系の画風が明確に示されています。安堅と重なる時期の制作と推測される「文清」印「山水図」(個人蔵、図1)には、「早春図」(1072年、台北故宫博物院蔵)に代表される郭熙画風との密接な関係がうかがえます。ここでは主に構図・空間表現について比較します。両者は共に、前景中央から垂直方向に高山が立ち上がり、両脇に閉ざされた、あるいは開けた空間を配する構図を採用しています。また、樹木の大小比率と濃淡差、および霞による遠近表現の手法も共通しています。15世紀末期の作例と考えられる「煙寺暮鍾図」(大和文華館蔵、図2)

にも、積み上がった山塊と開けた水景の組み合わせが見られます。しかし、主山は全体に右側に寄って、南宋時代に流行した対角線構図との親近性が生まれ、前・中景と後景の山塊は霞によって明快に分断されています。より時代の下る16世紀後期の「山水図」(個人蔵、図6)に至ると、景観の間の境界はよりわかりやすくなります。主山は霞から浮かび上がるように表され、この点では李在「山水図」(東京国立博物館蔵)のような、15世紀前期、明の宮廷画家による李郭派山水にも接近します。

北宋後期に活躍した中国文人画家・李公年の「山水図」(プリンストン大学美術館蔵)は、北宋の郭熙派と、南宋に流行した詩意山水をつなぐ重要な作例です。郭熙画風を抑制、構図をより平明にし、画中人物によって詩情を漂わせ、台形の遠山造形などに江南地方の山水画伝統を取り入れています。15世紀後期の「漁村夕照図・平沙落雁図」(大和文華館蔵、図3・4)は、このような大陸画壇の傾向を反映させた作品と指摘されています。また、梁彭孫(1488~1545)「山水図」(個人蔵、図5)に見られる、柔らかい弧を描く山の稜線の連続や、なだらかな山形も、この系譜に位置づけられるでしょう。ここに挙げた、「煙寺暮鍾図」、「漁村夕照図・平沙落雁図」、梁彭孫筆「山水図」はいずれも、東アジアの詩と絵画に多く表された「瀟湘八景」(中国・湖南省洞庭湖とそこに注ぐ瀟水・湘水流域の名勝八景)を主題にしており、朝鮮半島における詩画一致

の美意識の盛行を物語ってもあります。

一方で15世紀中後期に作られたと推測される別の「山水図」(個人蔵)は、元代李郭派の影響がより顕著な作例です。左下に前景の樹木と坡石を置き、江水を隔てて対角線上に低い台地を霞越しに連ねて後景を表す、遠小近大を強調した構図は、例えば、朱德潤「林下鳴琴図」(台北故宫博物院蔵)にも見られます。

粗放な筆法と明暗のコントラストを強調する、明代の所謂「浙派」画風は、16世紀には朝鮮半島にも波及していました。「瀟橋尋梅図」(大和文華館蔵)に見られる山巒および、そこに施された筆墨は、李在「雪景山水図」(個人蔵)のような浙派風の李郭派山水に類似します。崔命龍筆「月夜舟遊図」(大和文華館蔵)にも、浙派に属する呉偉(1459~1508)・張路(16世紀前期活動)の水墨山水人物画の影響が顕著です。この他、「樓閣山水図」(個人蔵)には、明代蘇州で唐宋青綠山水画風を復興した職業画家・仇英を学習した痕跡が指摘されます。これら16世紀後期の作例からわかるように、これ以降、中国の明・清帝国と李氏朝鮮王朝の新たな交流を背景に、朝鮮画壇は、宋・元代の李郭派山水の枠組に留まらない、多様な展開を示していくのです。(植松瑞希)

※下線は本展出陳作品です。

図1



図2



図3



図4



図5



図6



季刊 美のたより No.196

平成28年 10月 1日

発行 大和文華館